

## 審査の結果の要旨

氏名 李 庠沃

論文題目 付添家族の行動特性からみた周産期医療施設の建築計画的研究

本論文は、付添家族の行動特性から周産期医療施設の特徴を把握し、それに基づいた建築計画的提案をすることを目的としている。産婦人科・小児科を中心とする周産期医療施設は、病気ではない出産をその医療の対象とすることから、他の一般病院とは異なる建築的特徴が求められる。特に、出産は病気ではないが出産を共に体験する意味で付添う家族がいること、新生児・小児患者の場合自立した行動ができないため付添う家族が必要となることなど、様々な場面で付添家族が存在することは周産期医療施設の大きな特徴であり、それも産婦人科・小児科、外来・病棟で異なる様相を示す。そのため本論文は、周産期医療施設の各部門において付添家族の行動を観察することにより、それぞれの部門における付添行動の実態を明らかにし、付添家族に配慮した建築空間を提案することを目指すものである。

本論文は全7章で構成される。

第1章「序論」では、研究の背景として周産期医療施設と付添家族について概観し、周産期医療施設およびその特徴である付添家族を対象とすることに意義を見出し、研究の問題意識と目的とすること、既往研究の中で本論文の位置づけを明らかにした。

第2章「周産期医療施設の概念と構成」では、周産期医療施設の概念、関連用語を整理し、周産期医療施設の定義と社会的現状を明らかにした。また、その施設基準を基に周産期医療施設の条件と、周産期医療施設を構成する施設基準として必要な構成部門として「MFICU」、「産科病棟」、「NICU・GCU」、「外来」をあげ、機能上または定義上関連性が認められる部門として「分娩」、「手術」を加えた。

第3章「周産期医療施設の建築的構成」では、第2章で分類した構成部門について、事例から平面的関係性を把握した。

付添家族の居場所と各部門の関係は、周産期フロア内に各部門または関連性が高い部門をゾーニングし、そのゾーンまたは部門ごとに付添家族の居場所を確保する「分散型」と、周産期フロアを一つのゾーンとしてまとめて居場所を確保する「まとめ型」の2つに分類されることを示した。

第4章「周産期医療施設の部門別利用様態」では、事例とする周産期医療施設の平面構成の特徴を把握し、各部門内での患者と付添家族の一般的動線を把握した。

小児科外来、母子保健科外来、産婦人科外来、小児科病棟、産婦人科病棟それぞれ患者・付添家族の動線が異なることが明らかになり、それらを図式で表した。

第5章では「付添家族の行動特性」では、行動観察調査により各部門での付添行動場面を考察し、その分類を行った。

付添家族の行動は「移動行動」、「患者補助行動」、「交流行動」、「待機・滞在行動」に分けることができた。またそれらの行動は患者の世話や患者の補助をする「付添行動」と「日常的行動」の2つに分けられる。

また、付添家族を患者との関係性を基に「第1付添家族」～「第4付添家族」に分類して属性を把握した。

小児科外来、母子保健科外来、産婦人科外来、NICU・GCU、第1病棟（産婦人科）、第2病棟（小児科を含む混合病棟）それぞれの部門に対し、「第1付添家族」～「第4付添家族」別に、「患者補助行動」、「付添行動」、「移動行動」、「会話・交流行動」、「滞在行動」、「見舞行動」の行動別頻度が比較され、各部門の付添家族の行動の特徴が示された。また、その行動場面が行われる空間利用の特徴も把握し、周産期医療施設に特有の付添行動特性を考察した。

第6章では、「周産期医療施設における建築計画的提案」では、付添家族の行動場面と行動特徴に基づいて建築計画的提案を行った。建築的提案は、各部門での付添家族の行動が異なるため、各部門それぞれに調査で見出した問題点を解決するように提案した。この提案は調査事例とした施設を基に改善案というかたちで提示した。

第7章では、以上の総括と今後の課題を提示した。

以上のように本論文は、周産期医療施設の各部門において付添家族の行動を観察することによりそれぞれの部門での多様な付添行動実態を明らかにし、それぞれにおける問題点を示し、付添家族に配慮した建築空間を提案することができた。このことは、今後の患者を中心とする利用者の視点からの医療施設の建築計画における重要な知見を提示するものであり、建築計画学の発展に大いなる寄与をなしうるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。